9　エジプトの日本研究

アハマド・M・ファトヒ（カイロ大学）

エジプトにおけるいわゆる日本研究は、「健全な」状態にある欧米や中国などの日本研究を見る場合、比較的幅が狭いどころか、むしろ殆どまだ出来ていないと申し上げたほうが、妥当ではないかと思う。前回の国際シンポジウムの報告書を読ませて頂いたところ、中国・東アジア・ヨーロッパ・タイなどでは、いかに日本研究が歴史に深く根ざし、従っていかに目ざましい発展が見られ、素晴らしい業績が上げられたか、強く感じられたのである。

そこで、エジプトおよびアラブ世界においての日本文化や文学などの研究の実状を振り返ってみたが、この発表では、エジプトにおける日本研究を大きく2つに分けて取り上げたいと思う。

その前にエジプト人およびアラブ人の日本のイメージ、そして日本・エジプト両国の間の交流に少し触れてみたいと思う。まず、日本とエジプトおよびアラブ世界との交流の歴史に触れてみたいと思う。

ご存じのように、昔はエジプトおよびアラブ世界と日本とはほとんど交流がなかった。歴史をひもといてみれば、むしろ中国との交流が深かった。少なくとも7世紀頃まではアラブ人は中国を大地の果てと考えていたらしい。それは、当時アラビア半島に現れた預言者モハンマドの言葉に求められるだろう。預言者はこういうふうに言っている。「学問を極めようとするならば、最果ての国である中国に行って学ぶがよい」と言われた。

やがてイスラム教が各地に広まり、交通が盛んになると中国人などから、さらに中国とは違った国があることをアラブ人ははじめて知らされたわけである。『千一夜物語』にたびたび出てくる不思議な国「ワクワク」とは、おそらく日本のことではないかという説が議論されたことがある。

13世紀の後半、アラビアと日本とは不思議にも共通の運命にあったのである。両国がほぼ同じ時期に蒙古に襲撃されたのである。幸運にも、大陸との間に天然の要塞、つまり海があった日本は特記すべき被害を受けなかったが、アラブの被害は悲劇的なものであった。都市も城も破壊しつくされ、当時のイスラム帝国の首都バグダッドにいたイスラム教徒の最高指導者（カリフ）も、蒙古兵によって殺されてしまったのである。

この20世紀になってはじめて日本のことがエジプト人の関心を引いたのは、何よりも日露戦争のときの日本海軍によるロシアのバルチック艦隊撃沈の事件であった。その出来事が当時のエジプトの新聞に大きく取り上げられた。また、これが一部のエジプトの詩人の感情をくすぐったわけである。中でも、この20世紀前半に大きく活躍したエジプトの故アハマド・シャウキの作品が有名である。その詩は、日本の戦いぶりを誉めたたえたのである。その詩

の中で、ミカドという言葉がそのままの発音で出てくるのである。この詩は1940年代までのエジプトの高等学校の教科書にずっと載っていた。

そして第二次世界大戦中、イギリスの植民地であったエジプトは、日本を含めて枢軸国の陣営に同情するのは、当時の状態からいって当然のなりゆきであった。特に日本に対しては同情よりもむしろ強い関心さえ抱いたのである。それはやはり、何よりもエジプト人に馴染みやすい神風特攻隊の戦いの精神が充分に通じたからだと言えよう。

そして、1964年の東京オリンピックを契機に、エジプト人の間では日本に対するあこがれや関心が一層高まり、日本びいきの人はかなり増えてきたのである。そして、1974年、ちょうど石油危機が終わった頃、カイロ大学ではアラブ世界初の日本語科が誕生した。また、エジプトはやはり日本の文化とか文学よりもむしろ政治とか経済に関して非常に興味を持つようになる。つまり、日本はどうやって経済発展を成し遂げたのか、そういう点について、すこぶる興味があるわけである。

一つの例をここであげてみるが、4、5年ほど前、私の6つぐらい下の後輩が裏千家のほうに行ってお茶の勉強を2年間やってエジプトに戻ったが、全然習ったことを活かすことが出来なかった。結局お茶の勉強をしてきたといっただけで、彼のある友人にバカにされて「お茶をつくるならおれが教えてやろう。それは台所で5分しかかからない簡単なことじゃないか」といわれたそうである。つまりエジプトではあまりそういった日本の文化を重視しないわけである。だから僕は、後に「あんまり人前でそんなこと言わなくていい。日本へ行って私は日本語を勉強してきた。日本のお茶の勉強というのは、日本語科内なら、お茶会をしたり、あなたを講師にしてお茶の研究について講義か講演をしてもらったりしてもいい。しかし、普通の人にはあまり言わないほうがいい」と助言した。

もう一つの例がある。ちょうど2年前の10月、日本政府がエジプトにニューオペラハウスを寄付した。ニューオペラハウスのオープニングのとき（後輩の話に戻るが）、彼はお茶のデモンストレーションをやろうと思って、ニューオペラハウスの館長とずっと交渉を進めたが、結局最後のところになって館長が言ったのは、「お茶のデモンストレーションをやるなら、休憩の間、軽くお客様にお茶を出してもいいじゃないか」と、つまり館長はその茶のことをソフトドリンク感覚で見てしまったわけである。結果的に企画はだめになったのである。

特に当時の館長は、西洋の勉強をした女性で、バレエを専攻していた。今の新しい館長はまた女性であるが、一応アラブの伝統的な音楽を専攻している方であるけれども、今度もまた、自分の留学とか研究はほとんどドイツだったのである。だから、せっかく日本が寄付したオペラハウスなのに、それを利用してエジプト人に日本の文化を伝えることはまだ出来ていない。それがオペラハウスの悲しい現状である。

オープニングのときも、歌舞伎のデモンストレーションがあったが、それがテレビで放送されたのである。エジプト人はそれを見て、非常に大きなショックを受けたわけである。歌舞伎を前もってエジプト人に紹介する番組はまったくなかった。いきなり歌舞伎を見たが、もちろん頭の中では、西洋の劇あるいはエジプトの劇に似たような感じのものだと思い込ん

でいた。だから余計ショックが大きかったわけである。

次に研究のほうに移る。それを大きく2つに分けるつもりだが、一つは個人研究を中心とした日本研究、もう一つは大学教育を中心とした日本研究である。まず、個人研究としての日本研究である。今の段階では本格的にその研究に取り組んでいるのは、カイロ大学日本語学科を卒業した、今の同学科のエジプト人講師たちである。今日はその中から簡単に4人の研究テーマについて触れてみたいと思う。その4人とは、まず、①イサム・ハムザ氏、彼は日本語学科第1期生で（33歳）、私の同級生でもある。②そして、1つ下の後輩のアラー・アリ氏、男性で日本語学科第2期生（33歳）。③そして、カラム・ハリル氏。男性で日本語学科第3期生（31歳）。④私、アハマドで日本語学科第1期生（33歳）。

まずイサム・ハムザ氏の研究だが、イサム・ハムザ氏は日本の思想史を専攻している。イサム氏は大阪大学文学部大学院後期を修了し、現在博士論文作成中である。イサム氏の博士論文は「明治時代における日本のエジプト研究とその思想的な背景」である。イサム氏はまた横井小楠研究を進めているが、これまで次の論文を発表してきた。まず沼山対話の漢文からの英文訳、それが大阪大学の『日本学報』第4号（1985年）に出ている。そして「横井小楠における新国家像」、これは『日本思想史学』第19号（1987年9月出版）に載っている。そしていま、横井小楠を含めて近代以前の新国家像について研究を進めているわけである。

次の研究者は、アラー・アリ氏。アラー・アリ氏は、つい最近筑波大学の大学院を中退し、カイロ大学日本語学科に戻って講師として活躍しているが、「明治開化期における文明論」という主題の博士論文をいま作成中である。彼は、明治期の代表的な思想家福沢諭吉の文明論を中心に研究を進めている。

3番目の研究者は、カラム・ハリル氏である。カイロ大学日本語学科専任講師のカラム・ハリル氏は、中世文学の和歌や日記や記録、特に藤原定家の和歌におけるいわゆる夢の観念を取り上げた。彼の博士論文は、いま印刷中であるが、1988年、社会文化史学会編の『社会文化史学』の24号に「『名月記』に見る夢の考察」という題の論文を載せた。

最後に自分のことだが、私は特に庶民あるいは一般大衆の生活や文化にすこぶる興味を持っている。そこから、日本庶民または一般大衆が生み出した特定の作者のいない文芸作品を最初から取り扱おうとした。修士論文では、日本とエジプトの水、つまり雨、海などを中心に扱ったことわざを取り上げながら、両国の庶民の生活に焦点を当ててみた。また、博士論文では、いま日本とエジプトの武勇伝、特に『義経記』や『弁慶物語』のような物語や語り物文芸を扱っている。日本人、エジプト人の庶民や大衆好みの英雄像を求めながら、両国の国民性を探ってみたいと思う。ところで、中京大学文学部の長谷川端先生の協力で、私は1年ぐらいをかけてやっとつい最近『弁慶物語』のアラビア語訳を終了した。いま現在エジプトの武勇伝『ベイバルス王伝説』（あるいは『バイバルス王伝説』）の日本語訳の作業を進めている。

これで私たち日本語学科のエジプト人スタッフは、自分の目で直接日本そして日本人を見ようとして、両国の共通点、また相違点をつきとめながら、まったく新しい味の研究の道を打開しようとしているしだいである。

また、日本語学科教員以外の研究者で、ラウーフ・アッバース博士（男性）、カイロ大学文学部歴史学科教授という方もいる。しかし、今までの博士の試みは、欧米の日本研究者が書かれた著作を英語からアラビア語へ翻訳するのみであった。その翻訳とは、まず「日本近代化の文化的な源流」（『エジプト歴史雑誌』1973年刊、エジプト歴史研究所）。これはアラビア語版である。第２、「日本における憲法設立運動」。これも同じ出版社で、アラビア語、カイロ大学出版で印刷された。

ところで、この間の２月24日から25日にかけて、ちょうど私がカイロを出発する前のことだが、カイロ大学政経学部戦略研究センターでは、同学部の教員を中心に「1990年代における日本の姿」というテーマのもとで研究が行われた。この研究会では、日本・エジプトの交流関係、そして発展途上国に対する日本の経済支援政策、日本と国際秩序への姿勢などのような経済または政治的な問題がアラビア語で取り上げられた。この研究会の準備をしたのは、東京大学政治学科大学院を卒業して現在カイロ大学政経学部専任講師のハリール・ダルウィッシュ氏である。

次に、大学教育としての日本研究についてであるが、前述したように、カイロ大学文学部日本語学科が開講したのは1974年10月のことであった。

それは、第４次中東戦争が巻き起こした石油危機のすぐ後の事であったが、日本語学科設立のイニシアティブを取ったのは日本側であった。その当時、第１期生の学生の数は43人であった。はじめの１年もの間、学科は１人だけの日本の先生に完全に頼っていた。２年目はその数が２人になり、３年目になると教員は３人となるわけである。そのまま定員が1987年まで３人で続くが、1987年10月から、私と同僚のイマン・サディクさんが留学を終えて帰国すると、定員が５人になる。そして、ちょうど３週間前、もう一人の後輩のアラー・アリ氏が日本留学を終えてスタッフに加わった。日本語学科講師でまだ日本留学中がほかに３人いる。筑波大学に２人、阪大に１人。学生の数は、いま大体１学年に15人前後がいる。

次に、日本語学科のカリキュラムについて。カイロ大学日本語学科の正式な名称は「日本語日本文学科」である。つまり日本語教育ばかりではなく、むしろ日本語と日本文学を半分半分やらなければいけない。しかし、実際２、３年ほど前まで日本文学史の講義が少し行われただけで、日本語教育のコマ数のほうがずいぶん多かったのである。カイロ大学文学部という以上は、やはり文学のほうが中心でなければならないという文学部教授会の注意に従って、最近カリキュラムに大きな変化が生じた。

まず、1988年度から１年生にアラビア語で日本文化・文明の本格的な授業がされるようになった。例えば、テーマの例としてとりあげると、日本人の源流・石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代の文化の勉強が文明の時間の中心になる。そして1988年度から３・４年生に日本文学史を以前と同じ形で日本語で受けさせるが、同僚の日本人スタッフからバトンタッチをされたエジプト人スタッフは、その量を増やしたのである。そして読書の時間では、４年生の学生は、1987年から『伊豆の踊子』のような中編小説を一通り読まされたり、吉行淳之介・五木寛之・石原慎太郎などのような有名な日本人作家のエッセーを読まされたりするようになる。

そして、1989年度から、以前運営されていた4年生の日本ジャーナリズムという科目が大幅に洗練され、日本社会、国内政治などの最新情報が取り上げられるようになる。私どもが去年この科目を依頼された時点で、夏休みを利用して日本に自費で1か月ほど滞在し、特にそのとき行われていた衆議院議員選挙を取り巻くさまざまな問題を研究し、それを取り上げたテレビやラジオのニュース番組などを録画したり録音したり、そして新聞や週刊誌を集めたりしてカイロに戻った。前述したものを日本ジャーナリズムの時間の教材にして、文学部にあるビデオやＬＬの施設を使って授業を行ってきたしだいである。

そして1989年3月から5月にかけて、国際交流基金より中京大学文学部中世文学軍記物専門家の長谷川端教授が客員教授としてカイロ大学文学部に派遣され、日本学科の3・4年生の学生を対象に、学科誕生以来初の日本中世文学の集中講義を行った。その講義が実り、今の学期の特に4年生の文学史の時間での積極的な姿勢が目立つようになっているのである。

ところで、大学で日本語教育の非常に大きな障害がある。それは、辞書がないことである。アラビア語・日本語、そして日本語・アラビア語の辞書がないとことである。ないと言うわけではないが、あるのは大阪外語大だとか、様々なところから出された簡単なものだけである。しかし、あまり徹底した辞書ではない。大体一番多いのは、語彙数から言うと1万5000語。しかし、全然用例が付いていない。つまり、ほとんど使いものにならない。そういう問題もあって、私だとか私の同僚は一番「長老」ということで、辞書を作る責任があって、私どもは大体6年前から辞書を作る下準備をはじめたのである。私の手に入る新聞とか雑誌に用例探しをしている。しかし、用例を集めるのには相当時間がかかりそうである。特にいま私たちはまだ博士論文のことで非常に忙しくて、なかなか辞書作成に時間をまわすことは出来ない。

もう一つの大きな障害がある。それは、日本を紹介するアラビア語で書かれた本がほとんど存在しないことである。あるのはただ英語からアラビア語に直した日本についてのもののみである。しかし、それを見るとどうしても私たちエジプト人の日本に対する見方とは違うということに気が付く。もちろん参考にはなるが、これらの本をいかして、テキストにしてエジプト人に日本を紹介するということは、日本に対するイメージがずれてしまうと懸念せざるを得ない。そういう責任もあるので、去年から私が、例えば日本の文化とか文明、文学史などのアラビア語のテキストを作りはじめているのである。

日本語学科の現状

先ほど日本語学科のスタッフの話に触れたが、合計7名で、帰国して現在日本語学科で活躍している日本語・日本文学教員は4人で、あとの3人は阪大と筑波大学の大学院博士課程に在学中である。実は12年前、はじめてスタッフが日本留学して以来、これまで博士号を取って帰国したのは1人しかいないのである。先ほど申し上げた留学中の同僚の3人のことであるが、1人は最近博士号取得の可能性が出てきたが、あとの2人は少なくとも近い将来博士号を取る見込みのあるのは1人もいない。

もちろん日本では、特に文科系で博士号を取るのは至難のわざであるのは、よく知られた

ことである。しかし一方、エジプトの大学では博士号を取らないスタッフは学問的に認められないし、助教授・教授にもなれない。そしてそのうちに大学のスタッフとしての資格を失い、非常勤講師として自分のキャリアが一生止まってしまうのである。今そういう目にあっている一人の女性がいる。

この状態が続くと、そのうち犠牲者が増え、日本語学科に１人か２人しか残らなくなると、日本語学科自体がピンチとなり、今までの十余年の日本政府、特に国際交流基金、そして私たち日本語学科のエジプト人や日本人教員の汗が水の泡になってしまうであろう。もし、日本ではどうしても博士号がだめな場合、その問題をカイロ大学に持ち込んで、カイロ大学で論文審査を行うように、国際交流基金やカイロ大学に便宜を図ってもらいたいと思う。カイロ大学側は、つい最近まで、先ほど述べた解決策に対して強固な姿勢を示し続けてきたが、取り残された問題はカイロ大学で論文指導のできる日本人助教授か教授の存在、また論文作成を可能にするような文学・文化・言語・国語などの適切な資料の存在にかかっているのである。日本語学科のこれからの行方がそれに左右されると申し上げても過言ではない。自分としては国際日本文化研究センターに大きな期待をいだき協力を求めているのである。